

# 助成年度：平成5年度

[所属] 千葉敬愛短期大学

[役職] 教授

[氏名] 中村 圭三 (他計6名)

[課題]

## 成田国際空港の功罪

— 空港開設にともなう環境の変化と人間生活の関わりに関する研究 —

[内容]

本稿は成田国際空港が成田市及び周辺環境—自然、経済、教育、生活環境—に与えた具体的な影響に関する実態調査報告である。

### 1. 成田国際空港開設にともなう周辺の大気環境の変化について

空港周辺の大気環境の変化に関する調査による主な知見は次の通りである。

- (1) 空港開設以後、冬期間の風系に変化が現れている。
- (2) 霧日数は、最近減少傾向にある。
- (3) 1993年4月から9月までの期間に佐倉で観測した降水の76.5%が酸性雨で、この間のpHの平均値は5.05であった。
- (4) 上記の観測においては、日本列島の南岸に停滞した前線上を低気圧が通過した場合(4例)には、全てが酸性雨となり、最も低いpH3.68は、この気圧配置に出現した。  
台風時(5例)には、いずれも酸性雨とは認められなかった。
- (5) 佐倉の低pH化には、 $\text{NO}_3^-$ よりも $\text{SO}_4^{2-}$ の方がより大きく寄与していた。
- (6) 1993年7月10日8時から7月11日8時までの1日間に、空港を中心とする千葉県北部地域において酸性雨調査を実施した。その結果によると、
  - a. 芝山を中心とする地域では $\text{NO}_3^-$ 濃度46.42mg/lが観測された。ここは、滑走路の南東方向の延長線上にあり、ジェット機による排気ガスの影響を多分に受けているものと推測される。
  - b. 京葉工業地帯に近い地域では、NS比( $\text{NO}_3^-$ 、 $\text{SO}_4^{2-}$ )が低く0.4程度であるが、ここから東方に向かってNS比が増加する傾向にある。特に成田国際空港付近におけるNS比は最高値6.25に達し、同空港の酸性雨に対する少なからぬ影響が示唆された。

### 2. 成田空港の地元を与えた経済的影響

空港が市民生活に与えた経済的影響について労働環境の変化を中心に考察したが、まず、①空港・関連事業所や工業団地の建設、都市化による1970年代以降の著しい雇用機会の拡大②約9割が第三次産業であるという特徴が明らかになった。労働力の移動については、①1975年から大幅な流入増に転換した。②1980年の時点で、市内就業者の約50%は市外在住者、③空港内事業所の従業者のうち、成田市及び周辺以外の県内市町村および県外の居住者が、6割近くを占めていた(1984年)。人の流入の観点から空港の入国利用者(例えば1982年は121万人)の動向を見ると、上陸客はその約17%、これ以外の空港内トランジット客(同年135万人)の約4%が、5時間以上サテライト内に留まるに過ぎない。同年の成田宿泊外国人客数は全国第二位であるが、その内62%はトランジット客で、しかもホテル内に留まった人が約76%(約13万人)、市内観光をした人はわずかに11%であった。このような現象は、地元の経済効果を考えるうえで重要な観点を示唆するように思われる。

### 3. 成田空港開港による教育環境への影響

成田市における教育の具体的な国際化の試みを、学校教育、社会教育、市民の国際交流の3分野から探った。

学校教育：国際化を重点目標に、小中学校での外国人講師による英語・国際化理解教育、国際姉妹・友好都市との生徒相互訪問、海外帰国子女・外国人子女教育の充実が計られている。このような背景を踏まえて、市内の高校生の英語への関心と空港の関係をアンケート調査した結果、外国人の姿が多く見られ、国際化の波に洗われているという町の現実が一部の高校生に英語学習の動機づけを与えていた点を明らかにした。

社会教育：語学関係の高校開放講座、成田ユネスコ協会が航空会社従業員対象に行う日本文化の紹介、婦人リーダーの養成を目指すウーマンカレッジの活動などを紹介した。

市民の国際交流：国際交流協会と Narita International Friendship Club の活動紹介。

### 4. 成田国際空港の生活環境に与えた影響

空港の生活環境への影響については、市議会議事録の検討を中心に行った。周辺住民の関心が、直接に自身や家族の健康被害に関する問題（騒音、等）から、経済的な功罪（経済波及効果のプラス要因と、土地の収奪・補償問題などマイナス要因、等）や政治的問題（国や県・関係市町村の対応、闘争とその対応等）に及び、最後に文化的問題（国際化、国際都市としてのあり方等）へと移っていく様子が読みとれる。更に問題を複雑にしたのは、開発の遅れた地域に突然空港という国の一大事業が投下されたこと、空港との位置関係により周辺地域の利害が互いに対立し、それぞれ鮮明に色分けされたところにある。

本研究の進行中に、成田空港問題の解決へ向けての大きな一歩が踏み出された。円卓会議の提案に国と反対派住民双方が一方の理解を示し、結果は国に対して計画の大幅な見直しを迫る、かなり厳しい内容のものとなった。成田空港問題は、未だに地元民にとってはあまりに生々しく、そのことがこの調査を技術的に難しくしている。徐々に住民との信頼関係を築き、長期的展望にたって調査を継続し、成田空港をめぐる諸問題を歴史の中に位置づけることが今後の課題である。